

研究室か、臼井研かで非常に悩んだので、研究室を最終決定する上では担任の先生にも相談に乗っていただきました。まずは自分の興味のある研究をしているところで、研究活動の経験を積みたいと思い、臼井先生へ臼井研で本プログラムに応募したい旨をメールで伝えました。

こうして臼井研での研究活動が始まったわけですが、ここからが大変な日々の始まりです。研究で使うための細胞を週2回植え継ぐ必要があり、基礎としてこの作業を初めに習いました。私たちの手には色々な菌やタンパク質がついていて、大気にも埃や菌が舞っています。それらから細胞や薬品を守るために細心の注意を払って実験を行わなくてはならないのです。また、細胞は乾燥に弱いので作業を手早く行う必要があります。私はよく雑だと言われるような人間ですし、そのような精密な作業はしたことがなかったので、初めのうちは薬品のビンの口の上に手を通してしまい先生を怯えさせてしまったり、薬品を測るのが遅くて先生に「今どんどん細胞死んでいてるからね～」と言われてしまったりしました。しかし週2で細胞の植え継ぎを続けているうちにどんどんと出来るようになり、前は1時間かかっていたのに今では10分ちょっとでできるようになりました。植え継ぎに慣れてきたら次はいよいよウェスタンブロッティングという手法を使い薬剤のタンパク質分解作用を確かめる実験を習いました。基本的に **1回習ったら次からは自分1人で作業をする**のが研究室です。基礎生のような学生実験と違って研究活動では実験手順の載ったテキストはなく、過去の自分がのこしたメモを参照しながら、自分でどのような実験をするか考えなくてはなりません。その大変さを今とても感じているところです。

最後に、心に残っている臼井先生から言われたことがあります。「実験で使う薬品の中には高いものもあるけど、学生さんが時間と手間をかけてやっとのことで作りあげた薬品もあってこれを絶対に無駄なものにしてはいけない」。私だけではなく **多くの人の時間と努力によってひとつの研究が成り立っている**ことを忘れてはいけないと思いました。

6.3. ARE

6.3.1. 概要

ここまで紹介してきた研究マインド応援プログラムは、生物学類が運営しているものです。一方、ここで紹介する ARE⁵⁾は筑波大学が運営しており、運営主体が異なるという特徴があります。

文系、理系問わずに研究がしたい学生を支援するプログラムで、4月と6月の2回、応募のチャンスがあります。こちらにも気になる研究室の先生に連絡・相談して研究計画や予算等の申請書を書き、審査されます。また、採択されれば研究のレベルによって研究費を得ることができます。以下に、AREを利用して研究活動を行っている学類3年生、鈴木さんの事例を紹介します。

寄稿してくださった鈴木さん、ほんとにいつもお世話になっております。今度ご飯おごります。

6.3.2. 学類3年生の事例紹介

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。私は皆さんが入学するとともに学群三年生になる生物学類の鈴木です。制服に袖を通すこともなくなり、10

5 正式名称：先導的研究者応援プログラム